

ふくしまからのアピール

有機農業が拓く持続可能な地域づくりへの道

福島県有機農業ネットワーク代表 菅野正寿

<田んぼ(TANBO)から飛んだのでトンボ(TONBO)>

私が有機農業に取り組んで15年目の年だった。田んぼ(TANBO)の雑草を抑えるためと山間部の日照不足を補うために、20cmの深水にして米づくりの管理をしていた、6月末の暖かい早朝。いつものように田んぼ(TANBO)を見回りに畦道を行くと、羽化したトンボ(TONBO)が飛び立った。1つや2つではない。50羽以上だ。柔らかな羽が朝日に輝き、銀色に光っている。

トンボ(TONBO)は暑い夏に里山に上り、高原で自由に空を飛ぶ。稲穂が黄金色になる9月に田んぼ(TANBO)に帰って産卵をする。田んぼ(TANBO)から飛んだのでトンボ(TONBO)というのだ。

田んぼ(TANBO)にはクモがいる。タガメがいる。カマキリがいる。カエルが足元で飛び跳ねる。田んぼ(TANBO)小さな命の世界。田んぼ(TANBO)の水はダムの役割を果たして、洪水も防いでくれる。そして、この水は里山の山林から流れる。先人が次代のために木を植えてきたからだ。美しい棚田の風景も里山の恵みも、私たちの先人以来ずっと農業が続いてきた結果だと思う。

<里山の恵みと人の輝くふるさとづくり>

私たちはこの豊かな里山の恵みを活かしたふるさとづくりを住民主体ですすめようと、2005年に「NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」を設立した。有機農業のベースである堆肥センターも立ち上げた。牧場と農家と企業が出資して、牛糞に籾殻、おがくず、藁、さらに食品残渣である野菜くず、かつお節、おから、そば殻、飴玉など14種類の地域資源の原料を完熟させた堆肥をつくるためだ。この堆肥でできた米や野菜、果物を地元の学校給食や都市部の生協などに市場を介さずに直接提供し、消費者との交流をすすめてきた。

さらに、耕作放棄地の再生のため、桑の葉やえごま、いちじくなどを加工して特産品開発に取り組み、雇用も拡大してきた。田んぼ(TANBO)と桑畑にトンボ(TONBO)の舞うふるさとの原風景を子どもたちに伝えていこうとする、地域資源循環型のふるさとづくりである。

そして、こうした有機農業をめざす福島県内の農家と地域のネットワークを広げる目的で、2009年には福島県有機農業ネットワークが発足した。こうして福島県の有機農業運動が軌道にのってきたときに、原発事故は起きた。

<有機農業による土づくりこそ復興への光り>

2011年3月11日の東日本大震災・原発事故による放射能は、このふくしまの豊かな里山を次々に汚染してしまった。それでも、私たちは土を耕し、種を播き、米も野菜も作り続けてきた。あわせて、農家、住民と日本有機農業学会・大学による共同調査を続けていく。その結果、粘土質と有機質の高い土壌ほど放射性物質(セシウム)が土壌に固定化され、農産物への移行が低減されることがわかってきた。つまり、有機農業による土づくりにこそ復興への光があるのだ。

2011年秋に収穫された福島県の玄米の調査では、98.4%が50 Bq/kg以下であった。野菜は30 Bq/kg以下であり、2012年のものはほとんどが検出限界以下である。

ただし、果実類やベリー類などの樹木系からの検出値は高い。きのこ類も100 Bq/kg以上だ。つまり、山林の放射能汚染が深刻なのである。福島県の面積の約70%は山林である。この山林から湧き出る(染み出す)用水の汚染対策をすすめていかなければならない。

原発事故から2年目の2012年は、この実態を明らかにしていきたい。有機農業にとって大切な地域資源である樹木、落ち葉、堆肥、藁などの放射能汚染値を地域ごとに綿密に測定し、対策を見出してかなければならない。

<食糧もエネルギーも地域自給こそ>

「これなら孫に食べさせられる」

自家製野菜に含まれる放射性物質の検査結果を見て、兼業農家のお年寄りが安心して言った。

放射能は目に見えない。だから、農産物と土壌を測定して科学的に「見える化」することが大切である。そして、正しい情報を消費者に伝えることが信頼につながる。農家の自給の延長に消費者の台所があるから、農薬や化学肥料は使えないし、使ってはならない。

春の山菜、夏の野菜、秋のきのこに果物、冬の干し大根、漬物、納豆など、地域ごとの旬の日本型食生活があって、長寿国となった日本。だが、輸入農産物と化学物質によって、人間も家畜も免疫力が低下してしまった。原発事故による放射能汚染は、あらためて旬の日本型食生活の大切さを教えてくれた。日本人が伝統的に多く食べてきた根菜類や海草。味噌や漬物などの発酵食品には、有害な物質を排出したり、腸の働きをよくする作用があるからだ。

日本には「身土不二」という言葉がある。その土地で採れたものを食べることが健康な体をつくる、人間の体を土は切っても切れない関係にあるという意味だ。アフリカにはアフリカの食生活があり、ヨーロッパにはヨーロッパの旬の食べものがある。それぞれの地域の食生活と、食べものを生産している農家を支えることが、健康をつくることにつながる。そのために、国や自治体は農業と食生活を支える義務があると思う。

食糧の地域自給と同時に重要なのは、再生可能エネルギーの地域自給である。私は昨年、畑でひまわりと菜種を栽培した。放射性物質を吸収させる効果があるとチェリノブイリ原発事故の経験から学んでいたからだ。ひまわりと菜種を搾って作った食用油を調理に使い、その廃食油を濾過して不純物を取り除いたストレート・ベジタブルオイルを農機具のトラクターの燃料に利用するのである。今、ふくしまでは、こうしたバイオ燃料や太陽光発電、小規模水力発電などが動きだしている。石油や原発に頼らない再生産可能なエネルギーに転換するときなのだ。

＜子どもたちの歓声がこだまする、ふくしまの再生のために＞

私たちは、ふくしまから訴える。

放射能によりいまでも避難を強いられている苦しみ。

農産物が汚染され、有機農業が続けられなくなったことを理由に自殺した農民。

自由に遊ぶことを奪われた子どもたち。

こうした苦しみを二度と繰り返してはならないと。

今転換せずに、いつ転換するのかと。

食糧とエネルギーの地域自給をすすめることが、貧困と人権を守ることであると。

中国から伝わった日本の稲作の歴史は、3500年にもなる。日本の唄も踊りも米づくりが原型である。だから稲作文化なのだ。

原発事故によって、ふくしまの稲作文化にピリオドを打つわけにはいかない。日本の豊かな田んぼ(TANBO)の水は山に木を植え、山を守り、里山を手入れしてきたからだ。その結果として、ミネラル豊富な海も守られてきた。汚染された今、田んぼの大切さをあらためて身にしみて思う。山に木を植え、農地に種を播き、豊かな漁場守ってきた農林漁業こそが再生産と持続可能な社会をつくってきたのだ。こうした生業をベースに、1次加工、2次加工することによって地場産業が育ち、雇用が生み出されていく。

原発事故前から私の農場には、高校生や障がい者がトマトの収穫、田植えや稲の稲架け(収穫した稲を干して天日乾燥させる)、落ち葉拾いなどの体験作業に訪れていた。ふくしまの農村には、子どもたちからお年寄りまで、共に汗して働く姿があった。農業には地域コミュニティをつくる力があるのだと思う。子どもたちの歓声が響くふくしまを、もう一度再生したい。いや、再生しなければならない。

そのためにも、グローバルな競争社会からローカルな人間復興への道を、各国のそれぞれの地域に光をあてる有機農業を中心とする第一次産業の復権による持続可能な地域づくりの道を、ふくしまから訴える。そして私たちは希望の種を播く。

〈ふくしま発持続可能な社会への提言〉

最後に、私たちが考える持続可能な社会をつくるための10の提言を示して、結びとしたい。

〈脱原発〉

- ① 日本・アジア、そして世界すべての原子力発電所の即時停止と廃炉を強く訴えます。

〈放射線防護〉

- ② 住民の健康調査と、宅地・農地、農林水産物、食事、農業資材の放射能検査体制の早急な確立を求めます。

〈復興〉

- ③ 地域資源循環型有機農業を核に、第一次産業と地域経済を再生して雇用を創出し、住民主導による復興につなげます。

〈自給と自然共生〉

- ④ 農家の自給、地域の自給、自然と共生した暮らしを取り戻します。そのために、お年寄りから知恵や技を学び、自然とともに生きていく術^{すべ}を身につけます。

〈市民皆農〉

- ⑤ 大都市一極集中を解消して、誰もが耕す社会、農山村への帰農をめざします。

〈食生活〉

- ⑥ 肉食、化学物質、食品添加物、遺伝子組み換え食品を大幅に減らし、国産の穀物と野菜を重視した日本型食生活を中心とします。

〈第一次産業の振興と備蓄〉

- ⑦ 世界的食料危機と自然災害に備え、第一次産業を振興して、食料自給率の大幅な向上と備蓄をめざします。

〈顔の見える関係〉

- ⑧ コミュニティにおいても、都市と農村の間でも、顔の見える信頼関係に基づいた社会と暮らしを再生します。

〈エネルギー〉

- ⑨ エネルギー消費を減らし、分散型・再生可能エネルギーの地域自給を図ります。

〈脱成長〉

- ⑩ 経済成長に偏重した社会から減速し、いのちを大切にする、共に生きる社会を創りあげていきます。